

野呂栄太郎関連文献の収集

松 本 剛*

1.

私は先年、2冊の『野呂栄太郎』を書いた。1冊は信州白樺版（B5判483ページ、1983年）であり、もう1冊は新日本出版社版（新書判214ページ、1985年）である。前者には38ページ分の文献リストがあり、後者には8ページ分の文献リストがある。

初めの信州白樺版の『野呂栄太郎』を書くときに野呂に関する文献を完全に収集するつもりでがんばったが、印刷が終わってから重要なミスにいくつか気がついた。そのなかで最も決定的なものは肝腎の『野呂栄太郎全集』（新日本出版社）の最新の増補を見落としていたということである。野呂自身の論文のなかにも『全集』初版刊行後に発見されたものもあり、かれの『全集』は版または刷によって、収録論文の数が異なっているのであるが、私が見落としたのは、平野義太郎あての手紙を収録した1977年4月第1刷の増補版（第2刷、1984年2月）である。平野あての手紙は1970年6月の雑誌『経済』に掲載されていたので、手紙そのものを見落としたわけではなかったが、野呂の文献を完全に収集するという目的からいえば大失敗であった。このような失敗をしたのは、それまでの版や刷のものを何冊も持っていたので、つい気が緩んだとしかいいようがないのである。

このようなミスがあったにしても、私が『野呂栄太郎』を書くために読んだ文献は全部で約430点、そのうちタイトルに野呂の名前を掲げているもの140点であった。これは、文献に引用されているものを次々と辿って集めていくという文献収集の常道的なやりかたのほか、野呂と関係のありそうな分野の文献を勤を頼りに読んで、資料を探すというやりかたもとって、集めたものである。

また、白樺版では登場人物は340人にのぼるが、この人たちについての文献の側から野呂関連文献を探すという方法もとった。といっても、もちろん340人が一様に野呂と密接な関係にあったわけではないから、この方法を適用できたのは野坂参三はじめ10人ほどの人である。それでも、これによって入手した資料には貴重なものがあつた。

* まつもと つよし 大阪経済大学経営学部

2.

文献収集の作業のなかで、思わず「ああ、こういう図書館員もおられるのか」と感謝せずにはおれないことが、一再ならずあった。その一つは、岡田耕作「野呂栄太郎の故里」（『アカハタ』1956年2月21日）の入手のことである。『アカハタ』はこの年、2月19日の野呂栄太郎の命日を記念して、19日から22日まで守屋典郎の「野呂栄太郎『日本資本主義発達史』について——没後20周年にあたって——」を連載していた。私はこのコピーを国会図書館に依頼した。ところが、これと一緒に前記岡田の文章が送られてきたのである。それを読んで、驚いた。それには、野呂の遺骨が郷里に帰ってきたときの様子が書かれていた。それによると、遺骨には二人の刑事がつきそって来ており、葬式をすることを禁じたというのである。しかも、骨壺には針金が掛けられていたという。私は『アカハタ』にこのような文章が載っていることにまったく気がついていなかったが、図書館員は守屋の文献をコピーしているときに、偶然岡田の文章を発見したのであろう。そして、この文章がきっと私の役に立つだろうと思って、コピーしてくれたのにちがいないのである。私はこの館員に心から感謝した。

先程、野呂と関連のありそうな分野の文献を勘を頼りに読んで、野呂文献を探したと書いたが、この場面では同僚の図書館員にずいぶんとお世話になった。私は日本共産党史や学生運動史のなかで野呂が登場しそうな場面をあらかじめ見当をつけておいて、図書館のレファレンスサービスの担当者にじかにその場面の文献にあたってもらった。この援助がなければ、私の文献探索はずいぶんと手間取ったにちがいないのである。

3.

野呂関連文献の探索の過程で気がついたのは、ガリ版刷りの小冊子や地域のミニコミ誌に意外と貴重なものがあるということである。島田愛子「鶴沼時代の野呂さん」は藤沢市で出ている『新藤沢』という小さな雑誌に出ているものである（のち『文化評論』に転載）。島田は野呂が学生時代から暮らしていた家の人であり、時期についてのいくつかの記憶違いはあるけれども、多くのエピソードが紹介されていて、有益である。また、慶応時代の同級生有竹修二が書いた「野呂栄太郎と尾崎秀実」は1949（昭和24）年5月の『塔』という雑誌に出ている。信州白樺版を出した後で手に入れたもののなかでは、野呂の出身中学の後身である北海高校の雑誌『北海』や『百折不撓』（北海高校95周年記念アンソロジー）が重要である。これには野呂が中学時代に書いた文章や野呂についての回想記が載っている。この高校の教員北邦雄氏による野呂研究は新日本出版社版を書くにあたって非常に参考になった。さらに野呂の資料

として第一級の価値があると思われるのは、野呂が11歳のときに書いた毛筆の手紙である。これは小学校時代に野呂と親しかった松宮藤太郎氏が、いまでも保存されている。また、北海道平和委員会が出した清水与作『長沼農民は告発する』には野呂の父親のことが書かれている。

これらの資料はいずれもいわゆる専門雑誌や学界誌に載っていないものであるから、学界の文献目録では探すことのできないものである。野呂に関する研究論文は殆ど全部、各種の文献目録に収録されているので、これを入手するのは簡単であるが、点数は予想ほど多くはない。学説史研究としてはそれで十分であろうが、人物を描くということになると、これだけでは不十分であり、生活などに関するいわゆる伝記的部分はひとつづつに文献情報を探るか、野呂が生活した現地へ行って地元の研究者の資料を探すほかはないのである。

また、野呂も検挙された京都学連事件の「聴取書」と「尋問調書」も重要である。これは法政大学大原社会問題研究所のものを利用して頂いたが、同志社大学にもあると聞いている。

新日本出版社版では信州白樺版よりも多くの文献を使った。これは白樺版が出た後に発表された文献がいくつかあったということだけではなく、見落としていたものに気がついたためでもある。また、参照していながら、うっかりして巻末の参考文献リストにあげるのを漏らしてしまったものもある。守屋典郎『70年代以降の日本資本主義』（信州白樺、1984年）はその一つである。これには「野呂栄太郎——その精神と地位——」（初出、『信州白樺』第57・58合併号、1984年）が含まれている。初め雑誌に発表され、のちに単行本に再録されているものについては、初出誌のみ掲げ、単行本に再録されていることを見落としたもの、あるいはこの逆のケースもあった。こういう失敗をとおして完全なリストを作ることがいかにむづかしいかを実感した。

4.

最後に図書館や研究所の資料の相互利用がどんなにありがたかったかを強調しておきたい。この制度の恩恵がなければ、私の野呂研究は不可能であったといつてよい。とくにコピーによる利用制度がなければ、文献を手に入れるために何回も東京その他の図書館へ行かなければならないのであるから、私のように健康でない者には研究を諦めるしかないのである。私は2冊の『野呂栄太郎』を書くことによって、図書館問題や資料の全国的な相互利用制度の重要性についても目を開かせてもらった。これも大きな収穫だったと思っている。